

【問題】（演習）

出典：『無名抄』「頼政の歌俊恵撰する事」／ 横浜国立大学

現代語訳

建春門院の御殿での歌合のとき、「関路の落葉」という題に対し、頼政卿の歌に、

都には……都を出発するときは（初夏で、木々の葉を）まだ青葉として見ていたが、（すでに秋深く）紅葉があたり一面に散り敷いていることよ、今この白川の閥では

とお詠みになつておりましたが、（頼政卿は）そのとき「〔今度の歌合に際して〕、この同じ題の歌をたくさん詠んで、（歌合の）当日まで（どの歌を出すのがよいかと）思い悩み、（意見を聞くために）俊恵法師を呼んでお見せになつたところ、（俊恵法師は）「この歌は、あの能因法師の『（都をば霞とともに立ちしかど）秋風ぞ吹く白川の閥』〔都を春霞の立つ頃に旅立つたが、すでに秋風が吹いていることだ、今この白川の閥では〕」という歌に似ております。けれども、これは（歌合に）出して榮えるにちがいない歌です。あの（能因法師の）歌とは違うけれども、（同じ興趣を）このようにも詠むことができると、いかにも巧みに詠んでいる歌と思われます。似ているからといって非難しなければならないような（歌の）様子ではありません。」と判定したので、（頼政卿は）車を引き寄せてお乗りになつたときに、「貴僧の判断を信じて、それではこの歌を出すことにします。（歌合でもし負けたら）後の責任を（あなたに）取つていただきますよ。」と言つて（歌合の席に）お出かけになつた。その（歌合の）とき、（この「都にて」）の歌が、俊恵法師の（予想通り）見栄えがして勝つたので、（頼政卿は、歌合から）帰るとすぐにお礼を言いに（俊恵法師のもとに使いの者を）お遣わしになつた、その返事に、（俊恵法師は）「（あの歌には）見どころがあると思ってあのように申し上げましたけれども、勝負の結果を聞かない間は、ただもう胸がどきどきしておりましたが、（頼政卿が勝つたと聞いて、私も）たいへんな手柄を立てたものだと心のなかでは思つております。」と（書いたと）、俊恵法師は話しておりました。

問1 ① 都を出発したのは初夏で、あたりの木々はまだ青葉であつたが、長い旅をしてこの白川の閑にたどり着いてみるともう秋で、あたり一面に紅葉が散り敷いていることだ。

② 過去に秀歌とされる歌と同じ興趣を使っていて、かつ、季節の推移を青葉と紅葉という景物とその色の対比で表現する、という新味も見える点。

問2 同じ興趣をこのようにも詠むことができる

問3 賴政卿は、歌合から帰るとすぐに俊恵法師のおかげで歌合に勝ったお礼を言いに使いの者をお遣わしになつたが、それに対する俊恵法師の返事に

問4 「都には」の歌を推したことに対する自信はあつたものの、歌合での判定がどうなるかには心配があつたのだが、勝つたと聞いて、改めて自分の判断の正しさを誇っている心境。〔77字・解答例〕

【問題】(自習)

出典：『無名抄』「静縁」
け歌事」／共立女子大学 文芸学部／駒沢大学 法学部

現代語訳

静縁法師が自分の歌について（私に）語つて言うことには、

「鹿の音を……鹿が妻を恋うて鳴く声を聞くと、私までも思わず泣けてしまうことだ。まことに谷の庵に一人住むのはつらいことだつたのだなあ。

と（歌を）詠んでみました。この歌はいかがでしようか」と言う。私が答えて、「まあ悪くはありません。ただし、『泣かれぬる』という言葉は、あまりに浅薄すぎて、どうかと思われます。」といったのを、静縁は、「その言葉をこそこの歌の眼目と思つておりますのに、この非難は全く心外なことと思われます。」と言つて、（私が）ひどく非難したと思つてている様子で帰つていった。よくないと思つたままに言つてしまい、気をつけなければならないことなのになると、後悔していると、十日ほどして、また、（静縁法師が）来て言うには、「先日の歌を（あなたが）非難なさつたのを、正直言つて、納得できないと思いまして、不審に思われておりましたが、しかしながら、大夫公のもとに行つて、私が間違つたことを思つてているのか、人が悪く非難なさるのか、事の決着を付けようと思つて行つて話しましたが、（大夫公に）『なんだつて貴僧がこんな浅薄な歌を詠もうとするのか。『泣かれぬる』とは何事ですか。不都合な性根だなあ』と厳しく叱られてしましました。ですから、（あなたは）正しく非難なさつたのです。私が間違つて心得ていたのだと、お詫びを申し上げるために参つたのです。」と言つて帰つて行きました。（そういう静縁法師の）心のすがすがしさは珍しいことです。

解答

問1 ①||侍れ
②||め
③||し

問2 (工)

問4 自分の誤りに気づいたら、率直にそれを認め、相手に詫びを言いにきた点。〔解答例〕

解説

問1 「係助詞」については、次の三つの問題が頻出する。

- (a) 結びの語（活用形）、結びの流れの指摘
(b) 結びの文節が省略されている場合の、省略語の指摘
(c) 特殊用法（「もぞ」「もこそ」・「こそ——已然形」の逆接用法）の現代語訳

この設問のように、(a)の問題を解く場合は、「係助詞の種類と、結びの語に要求する活用形」を思い浮かべ、傍線部の係助詞の付いた文節を受ける文節を探し（ずいぶん離れている場合もある）、その文節の末尾（多くは文末）の語の活用形を確認すればよい。それが、上の係助詞が文末に要求する活用形であれば、それが結びである。連用形となつてさらに文が続いていたり、受ける文節の末尾が接続助詞や名詞である場合は、結びが流れていると判断できる。

①の「こそ」は、結びの語に已然形を要求する。この「こそ」の付いた文節「ただ、～という詞こそ、」は、まず、直下の「あまりこけ過ぎて、」に係る。この文節の末尾の語は「て」である。これは接続助詞だから、「結びが流れている」と早合点してはならない。本文をもう一度よく見よう。この後に、「いかにぞや聞え侍れ」という文が続いているが、これも、「ただ、～という詞こそ、」を受けている。末尾の語は「侍れ」で、ラ変活用「侍り」の已然形である。

②も「こそ」。直後の「我ひがことを思ふか、人のあしく難じ給ふか、」は、末尾に「か」という疑問を表す助詞が付いていて、後の「ことをば切らめと思ひて」の補足的説明をしている、挿入句である。

さて、その下に、「～と思ひて」とあるのに着目。つまり、「大夫公のもとに～ことをば切らめ」は、「思ふ」の内容なのである。したがって、②を含む文節は、「思ふ」内容の切れ目の文節、「切らめ」に係ると考えられる。末尾の語は「め」。推量の助動詞「む」の已然形である。

③の「なん（なむ）」は、結びの語に連体形を要求する。③を含む文は、③直後の「はしたなめられて侍りし。」で終わる。この

文末の語「し」は、「待る」という、ラ変動詞「侍り」の連用形に接続しているから、過去の助動詞「き」の連体形である。したがって、ここが結びである。

問2 発言（もしくは行動）から、その心情を説明する問題。本文に明記されていない場合は、その場面の状況や、同じ状況下でのその人物の他の発言や行動から推測することになる。

まず、傍線部の意味を考える。「これ」とは、直前にある「鹿の音を／住み憂かりけり」という、自分の詠んだ歌である。「侍り」は、「あり」の丁寧語で「ござります」という意味である。したがって、静縁は、「私の詠んだこの歌はどうでございましょうか。」と言つてることになる。この静縁の発言の直後に、「予いはく」と「予」が発言しているから、静縁は、傍線部の言葉を、「予」に向かつて発したのである。この「予」は、自称の人称代名詞で、地の文で使われているから、筆者自身を指すと考えてよいだろう（具体的に誰になるかわかるだろうか。この『無名抄』が、鴨長明の書いた歌論書であることを知つていれば簡単であるが）。

さて、静縁がこのように発言した心情は、本文中に直接には書かれていない。そこで、彼の、この後の発言や行動を追つてみよう。

静縁の和歌に対して、「予」は、「よろしく侍り」と評価している。「よろし」というのは、「よし」という最高の評価よりもちょっと劣る、「まあよい」ぐらいの評価である。そして、それに続けて「ただ、／聞え侍れ」と、「泣かれぬる」という言葉づかいが浅薄すぎでよくないと評している。「予」のこの「あまり良くない評価」に対しても、静縁は、4行目「静縁いはく」以下で、「その詞をこそこの歌の詮」つまり、「泣かれぬる」という言葉こそ、この歌の眼目だと思つていて、その言葉が「あまりこけ過ぎて」とは、心外な評価です、と、「いみじうわろく難ずと思ひげにて」つまり、「（私が）ひどく非難したと思つている様子」で帰ったのである。

この発言と様子から、静縁は、自分の和歌に相当の自信を持つていたと考えられる。静縁の「相当の自信」が一番強く表現されている選択肢は、「長明も必ず良い作品だと言うはずだと思つていて」とする（エ）である。

静縁は、自分の和歌に対しても、（ア）のように、「自分ではどんな出来だかわからない」わけではなく、（イ）のように、「しかしもう一歩かな」とも思っていない。また、長明の評価に立腹しているから、（ウ）のように長明を試そうとしているのでもない。

問3 現代語訳問題。

(2)について。まず、「よしなく覚ゆる」の意味がポイント。「よしなし」は、漢字をあてれば「由無し」となる。「由」は、「由来・由緒」が原義で、「理由・わけ」「手段・方法」「縁・ゆかり」「趣・風流」といった意味があるから、「由無し」は、「理由がない」「方法がない」「関係がない」「趣がない・つまらない」、そして、「役に立たない」といった意味を表す。

「覚ゆ」は、「思ふ」(の未然形)に、上代の自発・受身・可能の助動詞「ゆ」の付いた「思はゆ」から、「おもほゆ」→「おぼゆ」と転化した動詞。したがって、「自然に思われる」「(人から)思われる」という意味がもとで、そこから、「思い出される」「似ている」などの意味も生まれた。

さて、この「覚ゆ」は、もとは「思ふ」だから、「思ふ」「見る」「聞く」「言ふ」などと同様、知覚動詞である。「よしなく覚ゆる」が、「形容詞の連用形」+「知覚動詞」という形になつていてことに注意。この場合、形容詞は、下に来る知覚動詞の内容を表す。つまり、「よしなく覚ゆる」は、「よしなしと覚ゆる」の意味なのである。

「よしなく覚ゆるままに物をいひ」とは、「物をいひ」から、本文3行目の「予いはく、」という発言を指していると考えられる。この発言は、筆者の、静縁の和歌に対する感想だから、「よしなく覚ゆる」とは、「(静縁の和歌は)おもしろくないと(私が)思う」と訳すことができる。この直訳に最も近いのは(ア)。

(イ)の「何となく思った」では、「よしなく」が「覚ゆ」の内容を表すことが表現できていない。(ウ)では、「よしなく」が正しく訳出されていない。

なお、傍線部(2)の最後に、「と、悔しく思ふ」とあるのに着目。つまり、傍線部(2)冒頭の「よしなく～事を」は、「思ふ」の内容なのである。「思ふ」の主語は、「物を言ふ」と同じ筆者。したがって、「心すべき事を」は、(ウ)のように「言葉に気をつけろと言われ」とは解釈できない。

(3)について。選択肢の比較から、「おこたり」の意味がわかれれば解答は導き出せる。「おこたり」とは、「怠る」という動詞の連用形が名詞となつたものである。しかし、「怠る」よりも意味は広い。「怠ける・怠慢」の他、このことが原因で起こる「過ち・過失」、怠慢や過失などを「詫びること・謝罪」、怠慢や過失の原因と考えられる「悪い宿命・不運」という意味を表す。

したがって、「おわび」と解釈している(ア)が正解。

しかし、傍線部全体の分析から解答を導き出してみよう。(3)を含む発言は、6行目「又來たりていふやう、」の後から始まるが、

この発言の主は、「又來たり」という行動から、「静縁」である。(3)の後半は、「と、おこたり申しにまうでたるなり」とあるから、前半の「我（くる）ぞと」は、「申しにまうで」の内容、すなわち、「静縁」が筆者に言いに来た内容である。そこで、「我あしく心得たりけるぞと」を直訳すると、「我（静縁）」が「あし（＝悪い）」と「心得（＝理解する）」ていたことよ、ということになる。何に対して「悪いと理解していたのかと言えば、文章の前半、4～5行目の「その詞を（く）覚え侍り」を指していることになる。

したがって、「私はあなたのことを悪く思っていた」とする(イ)は誤り。そして、「私のことを軽蔑しているだろうと思い」と、「心得」の主語を「静縁」ととつていい(ウ)も誤り。したがって正解は(ウ)。

問4

本文の内容把握問題。傍線部の「有り難し」は、古今異義語である。古語では、「有り」 + 「難し」で、「有ることが難しい」がもとの意味。「めったにない」というところから、「めったにないくらい優れている」の意、また「実現が困難である」「生きにくことが難しい」という意を表すこともある。

ここでは「心の清さ」に対して「有り難し（＝めったにない）」と言っている。誰の「心の清さ」かと言えば、「静縁」である。したがって、傍線部(4)の直前に書かれている「静縁」の言動から、「心の清さ」を表すと考えられるものを探せばよい。

本文前半で、長明に自分の和歌を非難され、怒って帰った静縁が、また、長明のもとにやつてきたのである。それは、何かが言いたかっただめだと考えられよう。それは、本文10行目の、「我あしく～まうでたるなり」ということである。長明は、この発言に「心の清さ」を見たのである。

《補充問題》

現代語訳

問1

- (1) 「東国の男をじ覽になることになるでしょう」

- (2) 「私の言う（ような）ことをお聞きになるのがよい」

- (3) (4) どうしても来いと言うのならば行こう。

問2

- (1) (4) 命のある（ような）かぎり念佛をしよう。

問3

- (1) この幼い者は強情ですので、面会しないででしょう。

- (2) 「まさか負けないだろう」と思った試合に思わぬ失敗をした。

- (3) (4) 桁ちない名声を後世まで残すのは、願わしいことであろう。

- 惟光の朝臣が泊まっている所に行つて、急いで参上せよということを言え。

解答

問1 (1) 推量・終止形 (2) 適当（勧誘）・終止形 (3) 意志・終止形 (4) 婉曲・連体形

問2 (1) まじく (2) まじ (3) べけれ (4) べき

L2T
高2難関大国語



会員番号	
------	--

氏名	
----	--